



茨城県地域臨床 教育センターだより

2012
Vol.04

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

平成24年11月1日発行(第4号)

HPV(ヒトパピローマウイルス)を知ろう(1)

副センター長
教授

沖 明 典

専門領域 ■ 婦人科腫瘍疾患

2011年3月から婦人科部門を新規開設いたしました。茨城県は産婦人科医不足が深刻で、当科は県央地区のみならず、県北地区全域、県西地区の一部からの患者さんの紹介があり、現在の医師4名の診療体制では十分とは言えない状況ですが、できるだけ当院での治療を行うべくがんばっております。今回は婦人科がんのなかでも最近話題の子宮頸癌検診とヒトパピローマウイルス(以下HPV)についてお話をさせていただきます。

2008年にzur Hausen博士がノーベル医学生理学賞を受賞したことが話題となり、子宮頸癌とHPVの関連が一般に知られるようになりました。子宮頸癌は女性のなかでも妊娠可能年齢では乳癌について罹りやすいがんであり、これはこれから妊娠・出産を予定している女性が母親になるチャンスを奪い、または幼い子供を残して命を落とす原因ともなる重大な疾患です。zur Hausen博士たちは、子宮癌の原因がHPVの子宮頸部への持続感染が原因であることを突き止めたことが人類に貢献したことで、ノーベル賞受賞されたわけですが、これをきっかけとして子宮頸癌は早期発見と予防法が見いだされることとなったわけです。

HPVは原則的に性的交渉で感染すると言われていています。癌化には関連しないローリスクHPVと呼ばれる一部のHPVでは、分娩時に経腔的に新生児の咽頭に感染して、乳児期に乳頭腫という良性腫瘍を引き起こすことが知られていますが、子宮頸癌への進展を来すHPV16型・18型といったハイリスクグループと言われるHPVは性的交渉で子宮の入り口である子宮頸部に感染します。これらの大部分は免疫担当細胞により、体内から除去されますが、感染したHPVの型や体調などにより、体内から排除できないと持続的に子宮頸部に感染している状態になり、その中の一部の女性が運悪く子宮頸癌を発症することになると言われています。HPV感染自体は女性であれば、一生に1回程度は感染する可能性があるような、非常に普遍的な感染ですが、そのなかで運が悪い女性が子宮頸癌まで進展してしまうものだということを理解してください。

このようにHPV感染を背景として癌化する子宮頸癌では、子宮がん検診にHPV感染の有無を調べる、HPV検査が導入されました。これまで子宮がん検診は子宮癌やその

前癌病変の細胞が、正常細胞と比べて形がいびつになる、細胞の形態異常をチェックする細胞診により判定していたのですが、ほとんどの子宮癌や前癌病変ではHPVが感染していますので、HPVに感染しているかどうかをチェックの方がより効率的に子宮頸癌の有無をチェックすることができ、見落としが非常に減少することがわかってきました。そこで近年細胞診だけでは完全に病変があると言えない場合にHPV検査で再度チェックする方法が採用されています。また、近い将来には細胞診とHPV検査を同時に行って、より精度の高い子宮がん検診を行うことが提唱されています。この細胞診・HPV検査同時併用子宮がん検診が行われるようになれば、これまで以上に子宮頸癌の発見に役立つことが期待されています。併用によって増加する検診のコストは、併用検診による前癌病変の正確な把握により、現在厚生労働省推奨している2年ごとの検診間隔を3年から5年に延長することが可能といわれており、十分に実現することが可能です。ただし、これはあくまで子宮がん検診を受診している場合です。わが国では子宮がん検診の受診率が欧米に比べて極端に低く、30%程度しかありません。HPV検査を導入することにより、検診の精度を高めても、検診未受診の70%の女性から進行子宮頸癌が続々と発見されて、我々の病院に紹介されてくる患者さんに遭遇すると無力感を感じる人が多いです。出来るだけ多くの女性に子宮がん検診を受診していただきたいと切に願っています。

もし、子宮がん検診で精密検査を進められた場合には、県立中央病院産婦人科にご相談ください。我々が治療のため最善を尽くします。最後にもう一言、子宮頸癌についての説明をお聞きになった患者さんは、口をそろえて「子宮頸がん検診を受けておくべきだった」とおっしゃいます。後悔先に立たず、思い立ったら子宮がん検診を受診してください。



内分泌代謝・糖尿病内科、この一年



准教授

高橋 昭光

専門領域 ■ 内分泌代謝・糖尿病内科

内分泌代謝・糖尿病内科という長い名称の診療科だと、何を専門にしているのか今ひとつピンと来ないかもしれません。「内分泌」とは「ホルモン」。新陳代謝をつかさどる甲状腺ホルモンや、血圧やストレスから身体を守る副腎皮質ホルモンなどを主に手がけます。「代謝」とは、身体の物質の利用・入れ替えのことで、具体的には生きるためのエネルギーとなるような糖や脂質、身体を作るコレステロールといった分野がこれに相当します。「糖尿病」は今や国民病になってしまいましたが、インスリンというホルモンと、糖の代謝の双方を取り扱うので当診療科のメインテーマといってもよいかもしれません。今回は糖尿病についてのお話と致します。

糖尿病は近年、日本での増加が著しく、予備軍もふくめると40歳以上の国民の7人に1人とも言われる国民病になってしまいました。しかし、その一方でやはり自覚症状にとぼしく、ついつい「自分は大丈夫」と高をくくってしまいがちなのがこの病気の恐ろしいところです。医学的には「インスリンの作用不足による慢性の高血糖を主徴とする代謝性疾患群である」と定義されていますが、血糖をさげる唯一のホルモンであるインスリンの「作用不足」というのがくせ者で、身体の中にインスリンはあっても、「作用」が邪魔されてしまう状態、「インスリン抵抗性」も糖尿病の一因となってきます。インスリン抵抗性の代表選手は、「メタボリックシンドローム」であり、メタボは動脈硬化性疾患、特に心筋こうそくや脳こうそくといった命に関わる病気になりやすい状態として近年注目を浴びていますが、そこから更に一歩すすんだ糖尿病の患者様は、糖尿病以外の条件がほぼ同じ糖尿病ではない方にくらべると、心筋梗塞が2～5倍は増えることが知られています。さらに糖尿病特有の合併症（眼、腎臓、末梢神経）は、それぞれ失明や透析、足の切断などの原因となる恐ろしいものですが、いずれもかなり重症で「手遅れ」に近くなると自覚症状がないためついつい後回しにされてしまいます。そのため、患者様やご家族様が糖尿病に取り組み、恐ろしい合併症で、生活の質が低下してしまわないようにするためには、何よりも敵を知り、自分を守るための知識を身につけて糖尿病をコントロールしていくことが大切です。

茨城県立中央病院にも数年前までは内分泌代謝科はあったのですが、昨今の医師不足の影響もあり、ここ数年は入院診療が行えない状態になっておりました。そこで昨年10月に茨城県地域臨床教育センターとして内分泌代謝・糖尿病内科を開設し、漸く一年がすぎたところです。常勤医師2名という小さな診療科ですが、しばらく中核病院に専門医が不在だったためか、当初は救急車で初診する緊急症の初発糖尿病症例やご紹介頂く症例も開業医の先生方が相当ご苦労された

であろう症例が多数ありてんてこ舞いの忙しさで、患者様に糖尿病コントロールのための知をつけていただく教育入院システムが十分構築できない状況が続いていました。冬期の感染症流行シーズンの収束とともに、糖尿病の緊急症例も減り、多少業務に余裕がでてきたことから、医師と看護師、薬剤師、検査技師、管理栄養士が県立中央病院の看護師、薬剤師、検査技師、管理栄養士スタッフと「糖尿病連絡会議」を非公式ながら編成し、糖尿病教育入院で使用するオリジナルのテキストの見直しと改訂、糖尿病教室のカリキュラムの整理と担当割り振りの見直しを進め、大分有機的に「糖尿病の教育入院」が行えるようになってきました。更に、病棟や外来の看護スタッフを中心に、インスリン注射の打ち方や、患者様ご自身が自分で血糖をはかるための簡易血糖測定器（自己血糖測定器）の使い方を、産業現場で使われている「仕事の教え方（TWI-JI）」に則り、患者様により有効に伝えるための方法を看護スタッフに伝え、外来において「入院するほどではないが、インスリンを打ち始めたほうがいい患者様」に対応が可能となってきました。

まだまだ、糖尿病外来での透析予防チームの発足や、糖尿病患者様の継続的なケアを行うための外来看護システム、病棟におけるビデオ教材やIT利用も視野にいたれた糖尿病教育システムの構築、糖尿病データベース作成による疫学情報の集積など、未解決、未実施の数多くの課題があり発展途上の診療科ですが、医師のみならず、糖尿病療養指導士に挑戦する看護師や、糖尿病看護認定看護師取得のために研修にでている看護師など、県立中央病院専任のコメディカルスタッフたちも日々奮闘努力しております。

また次回、当院でこれらの取り組みがどのような成果をあげてきたのかをお話しできるよう頑張ってまいりますので、是非、今後の発展にご期待ください。

今日の内容

- ・糖尿病とは？
 - 尿糖がでた！＝糖尿病？
 - 高い血糖は食べ残し～高血糖とインスリン
- ・原因は？
- ・症状は？
- ・合併症入門
- ・続けて下げようA1c
- ・治療の考え方

筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

ホームページhttp://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/hoken/cyubyo/rinsyokyoiku/index.html



茨城県